

藤井高尚書簡集(四)

飯 田 正 一

三六 「天保七年」 四月廿四日付

口状

弥御壮栄被成御起居、奉拝賀候。拙子義無恙去月晦日ニ帰郷、御降念可被下候。

漸々老衰は勿論之義ニ候所、旧冬

今春江懸而は、別而段付候而違候ニ付、

遠遊は此度限ニ相止メ、竹の菴ニ籠、

残生ヲ養候耳ニ仕、著述もの共今少々

かた付候志ニ御坐候。右ニ付『文後々集』之

御序文、御作意可被下候。讃州白鳥之

某、跋文出来まゐり候まゝ、為写候而

入御覽候。右之段申上度、如此御さ候。

頓首

四月廿四日

二陳

『松の屋文後々集』三冊、此節京ニ而板下
かき居申候。御序文御作り被下候ハ、御草稿
御見せ可被下候。凡の積リヲ以、勿論余分ニ
御板下御清書之系紙、板元大坂河内屋
義助ゝさし上可申候。此文集は、京の城戸も
板元ニ加リ申候。

一、『源平拾遺』と申書二冊、拙作□頃

出板いたし申候。京撰之書林ゝ御取寄、

御覽可被下候。『平家物語』・『源平盛衰記』

二書ニもれ候源平ノ人々の言行ヲ記、

愚評ヲ加へ申書ニ御坐候。大分珍敷作ニ而

御坐候。大坂ノ河義板元ニ而、京ノ城戸ハ加

入無之候。

三七 「天保七年」 九月七日付

七月六日之貴書、九月七日相届奉拝見候。此頃

秋冷ニ移候処、弥御安靜之由奉賀候。扱、中元
為御賀義金百疋被贈下、御厚情之義不淺
不薄奉感謝候。『松の屋文後々集』は先般
加筆、城戸迄差遣し置候而、系紙相添申候而、
差上具と頼遣し申候。定而最早御落手と
奉存候。扱、如此御序も奥書も揃候得共、
彫刻之義、今少し遅々相成申候。其訳は、
近年之米穀高価ニ而、書林共至而窮迫、
當時舌之方ニ被追候故、彫刻類一兩年相休
申度申出候故、無致方、任其意申候。但し此秋
豊作と相見え申候へば、又々来年は左様も有之間敷哉。
何分此段御含置可被下候。頓首

九月七日

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

藤井長門守

質濟京都へ出す 御報要用

三八 天保八年正月四日付

改年之御慶申納候。御□家被成御揃、
弥御清栄被成御越年、奉賀候。老拙無
恙加馬年候条、御降念可被下候。年甫
御祝辞申込度、如此御坐候。猶期不日之
時候。恐惶謹言

藤井松斎

正月四日

清水太左衛門様

二陳 旧冬十二月朔日之御状相達、忝拜
見、歳晚為御賀儀、方金百疋被贈下、
不相替御深情之事共、奉感謝候。

一植松氏ニ御逢被成候而、高雄遊覧之事
御聞被下候由、此人并永楽屋へ大ニ不沙汰ニ
打過申候。宜御伝へ被下度候。其節京にて
輕疫風ヲ煩、老人病後不調之処、又煩候故、
其後大弱リニて病人同様、寒中など昼ノ間
斗机ニ寄、少して雑事ヲ弁候事ニて、急成
当用ニさへ被追候故、永楽屋頼之網地など、
夫成ニ取置御さ候。

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

藤井長門守

京迄ハちん濟夫々 大急用

先私

〆西二月八日着〆

三九 天保八年七月八日付

尚々御文入之御状、岡山飛脚道ニ而水ニ落シ
申候由ニて、深断申出候。夫故ニ、御文之紙しみニ成申候。
御了簡可被下候。

六月二日之御状、七月六日ニ相届、奉拝見候。

暑熱之頃ニ御坐候へ共、弥御壮栄被爲在、
奉拝賀候。拙子無恙候得共、七十四ニ成候事ニ而、
今年ハ俄ニ老衰、寂早遠遊も難成様ニ

御坐候。今少し残生有之候ハ、哥集ヲ撰
置、『古今集新釈』半ニ成候を、書終可申と
志申候。

一『松乃屋文後々集』御序文御書被下、不浅
忝、且安堵仕候。遠境之事故、御故障共

出来候てハと、案し候て申上候事ニて、何も急候
訳ニ而は無之候。別而御出来もおたやかにて甚宜、
奉感心候。一ヶ所所有御坐候而加筆、御返し申上候。

系紙ハ、京之城戸千楯々差上可申候。同人を
相頼申候。前々ノ文集序ノ系板京ニ可在之、

存付候而也。河内屋一等も、大変後取込多様ニ

相聞え申候。右文集、板も取懸り候得共、急々ニハ
出来候様子ニ無之候。是も此度千楯ヲ深頼遣し申候。
追々同人々、御聞可被下候。

一大坂御留中大変ニ付、御案し被下候由、御深
情奉感謝候。御聞之通無難ニ帰郷、大分

こりもいたし候。且老衰遠遊は思絶申候。

右御報迄如此御坐候。頓首

七月八日

別陳

後便、来春迄之内ニ、御哥之御短冊二三

御患可被下候。其訳ハ、近来遠国々、哥帖
いたし候とてハ、御詠之短尺くれと申来候へ共
持不申候故、皆断候へ共、其中無抛方御坐候て、
困りもいたし候故、其用意ニ仕度候。其代り愚詠も
書候而可呈候也。

一御序之系紙之事、千楯江頼遣候得ハ、
同人々差上可申候へ共、多分此度之便義ニハ、
おくれ可申候。御勘弁可被下候。

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様 藤井長門守

質京迄済 御報御詠草在中

四〇 天保八年八月五日付

七月二日之貴書相達、忝拜見候。秋冷

相催候処、弥御安泰被成御起居、奉賀候。扱、

中元為御賀儀、方金百疋被贈下、不浅

奉感謝候。乍然、近来御疑問等も無之候

処、無御捨意御音物、甚痛入奉存候。右

御礼迄、如此御坐候。恐々頓首

藤井長門守高尚

八月五日

清水太左衛門様

尚々、御詠御作文等も御坐候ハ、御越

可被下候。御疑問等絶居申候。何ぞ御姑

可被成候。老拙義も、近来多病漸々ニ増、
俄ニ老衰、もはや京撰にも出申まじくと
覚悟定申候。左候ハ、少し閑を得申候。

〔酉十月廿九日着〕

尾張名護屋納屋町

清水太左衛門様

藤井長門守

ちん京迄ハ弘濟

要用御報

夫ハ先私

四一 天保八年十一月廿六日付

十月二日之貴書相達、忝奉拝見候也。

向寒之節御坐候処、弥御壮栄被成御起居、

奉拝賀候。老拙義、先頃持病之疝痛

起申候処、老衰故歟、前々と違、其後

久平臥、御報大ニ及遲滞申候。『文後々

集』序文、御清書被下候而、千楯方迄

被遣候由、忝安堵仕候。近来米穀高

価ニ付、京撰書林共大ニ窮迫、右彫刻

様之事共、怠候趣ニ相聞え申候故、拙子ハ申聞候は、

極老人之事ニ候得は、何分板下は為書、

拙子校合いたし置、序跋揃置候迄は、

急ニいたし置度申聞候所、承知ニ而、来春早々ハ、

『文後々集』は池田左馬之允前々之通板下

書候筈ニ御坐候。出板は少々遅く成可申候間、

左様御聞置可被下候。城戸杯は、此度は
板元退キ候様之不景氣ニ御坐候。

一御詠短冊教枚御越被下、忝奉存候。

諸国ハ、時々頼来候事御坐候而、御願申上候

処、沢山被下不浅奉存候。

右両条御報申上度、如此御座候。頓首

十一月廿六日

別陳

拙子義も、今年は段付候而老衰、何事も大ニ

違申候。齡七十四ニ相成候故ニ御坐候。右ニ付、

来年ハは每春大坂江出候事も断申、

竹の菴ニ引込り、いたし懸御坐候注釈

ものゝ著述ニ懸リ候心得ニ而、『古今集新釈』、

今年は取出し書居申候。来年中ニは、書終

可申候。然ル処、此書類板多御坐候へハ、

²いづれの板元ニなりとも、遣し可申心得ニ御坐候。

³『打聞』之板元へ、談し見可申と、河義ニは

咄置申候。御地の書林方、了簡は無之候哉。

御序ニ御咄御試可被下候。追而右書候

『新釈』之大様は、可申上候。

十一月廿六日

『古今集新釈』

⁴『臆断』・⁵『古意』有之候うへニ、『勢語新釈』書候ふり合ニ、
大概同様ニ御坐候。拙子存意ヲ以注し、『余材』・『打聞』・

『遠鏡』三注ノ是非ヲも、しりニ附候而論し、三注とも被誤候事ハ、其訳ヲ書候。無用ノ弁ハ省キ、事短ニ書候故、長キ注ニテハ無之、先哲ノ時代迄ハ古哥ヲ被釈候。学びのいまだひらけざりし故ニ御坐候。

尾州名護屋納屋町

備中宮内

清水太左衛門様

藤井長門守

京迄賁濟

御再言要用

〈天保八年酉十二月九日着〉

四二 天保八年十二月八日付

十月廿八日之賁書、十二月上旬ニ京_下下来候而、奉拝見候。寒氣之節御坐候得共、弥御壮栄被成御起居、奉賀候。老拙無恙候得共、年々老衰と申中ニ、今年は別而、段付衰候様ニ御坐候。右ニ付、来春は京撰江出候事、相止メ申候心得ニ御坐候。

一『大鏡』・『統世繼』兩序之御略注拝見、奉感読候。別而可申上事も無之候へ共、

『扶桑拾葉集』ニ出候『大鏡』之序と校合、

少し違候所々、並ニ愚存も少々張掃ニ書

記し、入御覽候。又一枚ものニ、御兩首ノ哥

御書記し、御見せ可成候も、愚存書加へ

御返し申候。右御報、如此御坐候。頓首

十二月八日

尚々、『紫式部日記釈』之御著述、大分ニ

天下ニ弘リ候様子ニテ、遠国所々、貴家之

御事申来リ、御短尺等為望申来候

故、先般申上候処、数枚御書被成被下、不浅

忝奉存候。追々可遣と奉存候。世上大分ニ

文革開ケ申候而、新著之書なども、よく

うれ申候由ヲ承候。先般申上候拙子作、此春

新板ノ『源平拾遺』など、板元之書杯のミ摺、

まだ仲間へ弘メ不申候内ニ、数百部摺候咄

ニ御坐候。此書、来春は御覧可被下候。

清水太左衛門様

藤井長門守

奉復

〈天保九年戊正月十五日着〉

四三 天保九年三月朔日付

去年十二月十八日之御状、京撰ニ滞、今年二月廿九日相達、奉拝見候。右之訳ニ而、乍延達此度御報御礼申上候。去歲晩為御祝義、金百疋被贈下、不浅不薄忝奉感謝候。今年は

京撰立出不申、心静ニ中山之花共見申中心ニ而

御座候。御雅事御坐候ハ、可被仰下、上方と

違、家ニ而は心閑静ニ而、御筆談等之為ニは、

宜方ニ御坐候。但、四月^{丙午}兩月之間ニ讃洲江渡、

三十日斗も逗留可致哉ニ御坐候。被仰下候

事共は、直ニ御状張弔、又は別ニも書候而申上候。
御礼言如斯御座候。頓首

三月朔日

尾張名護屋納屋町

備中宮内

清水太左衛門様

藤井長門守

京迄賁済

急要用御報

〈天保九年戊三月十四日着〉

四四 天保九年八月朔日付

なごや

清水太左衛門様行状

久御様子も不申承候処、弥御壮栄被為在候哉。拙子御聞及も可被下、此春¹三月中比発病、半年も過候故、漸近所之歩行位は、秋ニ成候而出来申候。極老人故、全快無寛束被存申候。扱先年ちらと御咄申上候『古今集新釈』書立申候故、古今之株板有之候書林へ、引請もらひ度存候所へ、江戸戸川因幡守殿家中、小田伴助と申もの、拙子門人ニ近來成候而、此辺ニ因幡守殿知行所有之、其所へ來候便ニ、此方近來候而、なごや永楽屋江戸出店の番頭と、右小田伴助と兼而懇意故、永楽屋ニは『遠鏡』之板元ノかぶ有之候へば、引受可申哉とすゝめ可申と申出候故、任其意、左候ハ、外書林は不問合候而、右永楽屋引請と心得可申と、小田伴助へ申聞在之候。

此段、永楽屋之御主人江、御咄可被下候。永楽屋引受被具候て、板ニ成候ハ、老後の大慶無此上候。

然ル処、大坂ノ河内屋儀助、引受申度と申出候へ共、

同人ハ到而ずるき男ニて、拙子作『松の屋文後々集』

御序も御書被下、其前ニも、『神の御蔭日記』と申関東

記行と二部迄、先年々渡し之在候へ共、一部も出来不申

忘れ居申候て、久く打込置、しミニ為喰置候様之事ニ而

見限り果し申、『古今新釈』など遣し候ハ、いく十年

過候而も、板下も出来候様之事有之ましく存候へば、

小田伴助と申武士を以、永楽屋ノ方へ引請被具候様ニ、

懸合置候へば、もはや取返しも出来候と、申聞候所、

左候ハ、儀助がなごや永楽屋之方へ、文通ヲ以、

何卒歩ニいられ、組合ニ被成具候様、頼見申度

申候へば、夫ハ其方之勝手次第、此方ハ頼候事ハ

不致と申聞候。右『古今新釈』御引請被下候へば、

板下も彫刻も、永楽屋被引受、なごやニ而出来候ハ、

無此上拙子仕合ニ御坐候。宜御取合せ可被下候。河義は一向ニ

論ニかゝらぬ、ずるき人物ニ御坐候。拙草稿もの新作

など、河義方には決而渡し不申候所存ニ御坐候。拙子ハ

草稿受取、打込候て年久捨置候而、少しも

不嫌候様之、不人□至極之ものニ御坐候。

拙子旧作、河義板多候へば、是等数十部ツ、

何百部も御買□ニて、其代銀を以御引取

至而少キガ可宜候。

被成候。御修法ニても被成候ハ、少々ハ歩ニ御加ヘ

河義方勝手向ハ富候方也。

被成候ても、不苦候哉と存候。極御内々ニて、此旨

河義事、困窮ニは無之候へ共、ずるき男故、歩ノ少キガ御心遣

永楽屋御主人へ、此状届次第、早速御咄

少くと考申候。半方御割合ニても受ハ仕候。

可被下候。河儀、永楽屋へ懸合不申候前ニ、

半分ノ歩ニ御いれ被下候様ニ申上候と被存候。

知らせ置申度候。拙子実意ニ御坐候。人の事ニても、

たゞずるき故御心配ヲ懸候てハと案じ候也。

忽ニ氣毒の出来候事故也。大坂ニて板下

板行いたし候ハ、拙子命終る迄、死しても

孫の左衛門へ遺言いたし置、此『古今集

新釈』草稿本、河義へとてハ決而渡し

不申候様、御聞置可被下候。河内屋儀助方ハ、

『消息文例』已来、『伊勢物語新釈』ニ至ル迄数十部

引受、大分金銀もまうけ候て、其恩も有之候事少しも不弁

拙子をば、塵芥の如ニ輕じ候て、

前文申上候如く、近来之作二部迄

打込、虫ニ為喰、人が尋候へば、松の屋先生も、

もはや流行ニおくれ、新作ものも俗向ニ無之と、

申由ニ御坐候て、恩不知の人ニ御坐候。此『古今集新釈』ハ、

『伊勢物語新釈』と同様ノ趣向ニて、『余材』・『打開』の

善惡ヲ論定し、拙子新説を以、一首の意

詞ハ委くとき候て、数十年骨折候書ニて、拙子著述之第一と、自身ニハ存候注釈也。

冊数いまだ不定候。『余材』ニ習候而、十冊ニとはい

かど、御考可被下候。若永楽屋引受被呉候ハ、

板下校合も、板本試摺校合も、貴君

被成被下候様、乍御面^(ツ)到^(ツ)奉願候。板下も

板本試摺も、終の一度ハ永楽屋に見せられ候様、

御見せ被下候様、御申可被下候。兩度ツ、ハ、貴君

御校合可被下候。永楽屋引受被呉候ハ、

猶追々可申承候。『古今新釈』、板下^(ツ)かきへ

渡し候拙子清書ハ、来年中と御心得可被下候。

来亥ノ春中ニハ、永楽屋へ渡し可申と、心ニハ

存居申候へ共、老人ノ事故、秋ニ成候事も万一

難斗候故、来年中と丈夫ニ申上候也。

秋初迄ニハ、多分無間違、渡し可申候也。

成丈急キ候て、三四月迄ニハ草稿渡し、

来年中ニ板下出来候様ニと、心ニは存

居申候。左候へば、存生中ニ板本見る事も、

可有候哉ニ御坐候。頓首

松 斎

戊ノ八月朔日

清水君

二陳礼本ハ十部くれられ候事、

鈴ノ屋ノ例也と、千椿

申出候て、久しく其通りニいたし来り申候。御聞置可被下候。
千櫓方へ、当時板彫刻困窮ノ断ニて休ミ。

尾張名護屋納屋町 備中宮内

清水太左衛門様 藤井長門守

別而急用事

京迄賃済夫の賃も京取替払済

〈天保九年戌八月十四日着〉

四五 天保九年九月十四日付

七月六日之御状、八月十五日之御状、追々京へ

届来候而、夫々拜見、弥御壮榮奉賀候。老拙

中風之病御見廻被仰下、不浅奉存候。右

御両通之御状御趣、乍大略此迄通ニ申上候。

老人病牀疲労も添候而、諸事如此行届

不申候条、御免可被下候。御意へ唯專要ノ事耳、

夫々略テ申上候也。

一中元為御祝義、御肴料金百疋不相替〔被〕贈下、

御厚情之至、不浅不薄深奉感謝、東方ニ向

遙ニ奉再拜候。惠比須市へ、追而拜受

可仕候也。

一『古今新釈』一条、東四郎御懸合、御苦勞不浅

奉存候。此一条何も急ぎ不申、追々承可申候。

右『新釈』も中風ニ付、再応之吟味行届

不申、急ニ書林へ渡候事出来不申、年内中も

無覺束位ニ御坐候。京ノ城戸方へ困窮之
断ニて、昨今は板元ニ無御坐候。御聞置可被下候。

大坂河内屋儀助へ、板元ニ候へ共、是又

近来は、拙子著述もの乍引受、久打込候而

数年怠り候故、一向頼ニ難相成候。夫故ニ

永楽屋江とも、存付候事ニ御坐候。河内屋は

困窮ニテは無之候。主人づるき男ノうへに、店引受

手代不埒ものニ而、言行大ニ不相揃、永楽屋も

左様御心得候が宜候。京城戸も、新板は

板元を退候へ共、旧板は京撰板元

仲間ニて御坐候事、年来之通ニ御坐候。

永楽屋被加候而、江戸同家之出店と、

京撰板元と、本かへ事被致候へ、

融通弁利可宜事ニ被存申候。

拙子著述之書、江戸ニ而不得由ニて、買人多

本少、手ニ入兼候由ニ、江戸人此方ニ来候而は、

毎々申候事ニ御坐候。永楽屋江戸店

番頭も、心得之事ニ而可有之候。江戸ニ而

拙子門人小田某、永楽屋江戸店番頭と

懇意ニて、『古今新釈』之事咄合可申と申候事ニ而、

今以様子聞え不申候。追々は右番頭も、

永楽屋主人へ通達可有之候へ共、江戸は

大ニ遠方、夫故貴家江御頼申上候。何分

追々宜奉頼候。大坂河内屋儀助、年来之

板元故ニ、『古今集新釈』板元を

永楽屋御引受ニ候ハ、板元ノ歩ニ御入れ

被下候と申は、一通りハ尤成事故、

拙子も、何卒少々御加ヘ可被下と、

申上候訳ニ御坐候ヘ共、右新釈

板下板行彫刻之事共、大坂に

御任せハ御断申上候。づるくて、又

数年打込可申候ヘバ也。『松の屋文

後々集』御序も、御かき被下候処、

此近年久打込、如何いたし候哉、

板下もかゝせ不申、于誠なげやり

不埒至極ニ御坐候。夫故『古今新釈』

河内屋饒助ヘ沙汰なしニ永楽屋ヘ

懸合しも、あまりニ不埒故ニ御坐候。

同人方は、金銀一向ニ不差出候て、

他の新作ものへなんでも引受、

久キ得意の拙子述作といへば、

打込捨置候が、甚にく御坐候。

頓首

九月十四日認置

二陳 拙子も今少しの残生ニ候へば、志候もの

可成丈書置候志ニ御坐候。

枕冊子春曙抄補正ニ

本文数本校合ノ是非ヲも記。

万葉略解補正

此ニツ『古今新釈』ノ次ニ出し候事。

其次ニ、

土佐日記考証補正

『さ衣物語』古写本数本校合正本

戊九月十四日認京城戸江登す。

十月十四日京ヲ出ス、城戸取次。

尾張名護屋納屋町 備中宮内

清水太左衛門様 藤井長門守

京迄賃済 急要用御意

京ヨリ先私

〈天保九年戊十月廿一日着〉

解説

三六 「去月晦日ニ帰郷」というのは、例によって春早々から上京していたものか。体力の衰えを思うにつけ、著述のことが心にかかっていたようだ。『松の屋文後々集』は、このころ板下にかかっていたというが、出板を急いで序文を依頼したのである。在宮内筆。

1↓書簡一 一注3

2猪熊(卜部)方主であろう。讃岐大川郡白鳥杜宮司。『榮屋筆記』等がある。高尚にも「榮の屋のことば」(後々集・中)がある。

3 『松屋文集』・『松屋文後集』につづくもの。三冊。板元まで決まっていたのに、結局未刊に終わった。次簡参照。草稿は大正十二年の関東大震災で焼失（『藤井高尚伝』）。ただし写本（中・下）は松屋会文庫（吉備津神社）蔵。

4 「実ハ平語・源平盛衰記・東鑑ナドヲ精読セシ軍学者又ハ好事家ノ偽作シタルモノアリシヲ高尚ガ真ノ史料ト信ジテ取出デタルナリトオボユ」（『藤井高尚伝』）。天保六年春序。奥に、「天保七年丙申十月新刻」とある。大坂浅井吉兵衛／駕頭辰三郎／岡田儀助／京都城戸市右衛門／前川市兵衛／江戸北沢伊八板。ただし、「□頃出版」の予定がずつと遅れ、実際の出版は天保九年か。↓書簡四二。板元には城戸も加入しているが、これは後で加わったのであろう。

三七 在宮内筆。「近来之米穀高価ニ而、書林共至而窮迫云々」が注意される。近年飢饉、各地に一揆等が起っていた。そうした社会状況を反映して、出版事情も非常に悪化していたようだ。『文後々集』の序文に関する記事は、前簡と一連のもの。「十月廿八日、書を伴信友へ送り、松屋文後々集に信友及び義門の添削せんことを求む」（藤井高尚先生年譜）。

1 ↓前簡三六

三八 在宮内筆。歳末年始の挨拶であるが、兼ねて体の不調を訴えている。「高雄遊覧之事云々」というのは、前年秋上京、高雄に遊んだのであろう。

1 植松茂岳。本姓小林氏、通称庄右衛門。尾張の人。号、松蔭・不知。有信の養子となる。宜長門。藩主義宣の侍読。安政戊午の変に坐して幽閉五年、のち藩費明倫堂教授。明治九年（一八七〇）三月廿日没。八十四歳。著書、『天説弁』。

三九 在宮内筆。年次は、文中「七十四ニ成候事ニ而」とあるのが確定できる。「今年は俄ニ老衰」などと老を訴えていても、著述の意欲は少しも衰えていない。なお歌集を撰み、『古今集新釈』を完成しようというのだから、頭が下がる。『文後々集』の序文を、宣昭が早く届けてきたので、高尚はひどく感謝しているが、これは宣昭としては、一つには高尚の老齢を慮ったことだったか。それよりも重大な記述がある。この年大阪に大事件が起った。

大塩の乱である。前年来の大飢饉で、難民の窮状は言語に尽し難いものがあつたが、大塩平八郎は、これが救済の目的をもって、二月十九日、同志とともに兵を挙げた。乱はわずか一日で鎮圧されたが、人心の不安は、容易に解消されない。「河内屋一等も、大変後取込多様ニ相聞え申候」というのは、高尚と交渉のあった河内屋一統も、いろいろと取込みで、容易ではないという話だ、の意である。「大坂御留中、大変ニ付御案し被下候由」とい、「御聞之通無難ニ帰郷」とあるのは、高尚らも、とにかく一応の取調べを受けたのだろう。

乱後、出版物の取締は、厳重を極めた。『^{享保}以後大阪出版書籍目録』には、

大塩平八郎作意の書物は天保乱後流布本の詮索厳しく、板木

並摺本摺立板行、無表紙端本、反古摺、表紙、裁切紙迄不残
東町奉行所盜賊方役所へ取上、悉く闕所（没収）に処し、板
元、彫師、摺職、表紙屋まで細密に取調を行ひ、開板免許済
の未板行の書物は開板免許を取消、売買取次貸本等一切之を
嚴禁し、願写本（稿本）の詮索、流布本の取締を本屋行司に
嚴命す。

と記している。河内屋一統の出版書で処分を受けたものは、『洗
心洞簡記』以下数点。因みに、大塩平八郎中斎は、大阪町与力と
して名声あり、退隱の後は陽明の学を教授した。挙兵に破れて市
中に隠れたが、捕えられて自刃。四十四歳。
1大塩の乱。

四〇 老衰を訴えているが、別に言うほどのこともない。在宮内
筆。

四一 在宮内筆。「近來米穀高価ニ付云々」というのが、ここで
も注目される。大塩の乱は一日で鎮圧されたけれど、人心は不安
に包まれていた。今年の収穫期を過ぎても、米価はなお安定しな
かったのである。物価の高騰、それに伴う購買力の減退で、書林
の窮迫も、想像以上のものがあつたらう。いま、A『^{享保}以後 大阪出
版書籍目録』とB『近世京都出版資料』によって、当時の上方出
版界の状況を、概観してみる。

Aは、出願（申出）点数で、括弧内は取消または不許可の数。B
は板行赦免の点数（七年以降を欠く）を示す。これだけで見ても、

年 次	A	B
天保元	29	25
" 2	30 (-4)	34
" 3	35 (-3)	32
" 4	31 (-2)	30
" 5	54 (-1)	56
" 6	50 (-4)	34
" 7	36 (-3)	
" 8	19	
" 9	23 (-2)	
" 10	36 (-2)	
" 11	20	
" 12	46 (-4)	

天保七〜九年ごろは、出版界が極度に不振だったことが、ほぼ見
当が付こう。八年度のAの数値が特に低いのは、明らかに大塩の
乱の影響である。『古今集新釈』については、すでに屢々触れて
いたが、ここでもまた改めて、その趣意を述べている。完成が次
々に遅れたのは、主として高尚自身の都合によるのだろうが、出
版事情の悪化ということも、その一因となっていたか。

1大平門。同「教子名簿」に、「京 池田左馬大允正詔」。

2「板株の権利は単に或る書物一冊だけでなく同種類の書物全体
の権利を總括的に有つことが出来た」（『京阪書籍商史』後篇六
七頁）からである。

3「古今和歌集打聴」。冊数不同（五・一〇・二一巻等）。真淵講
述、野村ともひ子筆記、秋成修訂。寛政改元己酉歲四月奥。東
都西村源六／摂陽渋谷与左衛門／松村九兵衛刊。この「板元
へ云々」は松村（敦賀屋）か。

4「勢語臆断」。契沖著。

5「伊勢物語古意」。真淵著。

四二 在宮内筆。前簡と違って、「新著之書なとも、よくうれ申候由云々」とあるのは、世の中も少し落ちついてきたというのだろうか。「紫式部釈之御著述大分ニ天下ニ弘候様ニて云々」は、多少は辞令の意を含んでいるとしても、とにかくその著が、世間に認められてきたことを喜んでゐるのだ。

1 『今鏡』。

2 詞文集。三十卷。徳川光圀編。

3 書簡三七にも出ていたが、刊行はようやく今年か。『享保版書籍目録』には、

源平拾遺 二冊

売弘 河内屋儀助

右売弘人よりの申出でを本屋

行司慎組にて聞届け板行

申出年月 天保九年九月

とある。ただし、申出を「天保九年九月」とすれば、それ以前、すでに発売されていたことになる。

四三 歳末祝儀の謝礼を主としたものだが、「上方と違、家ニ而は心閑静ニ而云々」と、閑雅を楽しんでいる様子も報じている。1 備中国中山。『松の落葉』一、「おのがすみかを松の屋と云ふは、古歌に「千年をまつのかき色かな」とよみたりし中山の麓にて、松多かる所なるに」。

四四 在宮内筆。「此春三月中比」とあるのは、前簡後間もなく

中風で臥床したことを指す。従って讀岐行はもちろん中止となった。

珍しいほどの長文だが、主な要件は、『古今集新釈』の出板を、永楽屋に引受けて貰いたいと依頼している件である。書簡二五では、大阪塩屋長兵衛が主となって世話することになっていたのに、それも都合よくゆかなかつたのだらう。従来の関係からすれば当然河儀あたりと交渉すべき筈であり、河儀もまた引受けたいと申し出ている。にも拘らず、頑なにそれを拒んでいるのは何故だったのか。高尚としても、よほど腹に据えかねた事情があつたに違いない。『松の屋文後々集』などの出板が遅れているだけで我慢ならなかつたのだらうか。大人げないようだが、口を極めて罵っている。「死しても孫の左衛門へ遺言いたし置、此古今集新釈草稿本、河義へとてハ決而渡し不申候様云々」とは、余程のことだつたと思う。『新釈』を「数十年骨折候書ニて、拙子著述の第一」と思っていると言うが、高尚としては多年手掛けてきて苦心したものだけに、本気でそうしたことを思い込んでいたのかも知れぬ。同時に、河儀に対する憤激が、一方では敢えてそう言わたののだらう。

これより先、高尚は、長らく手掛けてきた『古今集新釈』の原稿を、前年来整理（↓書簡四一）して、義門の許へ送付、校訂を依頼していた。義門は、今年二月初旬から校訂をはじめ、ところで高尚は三月十日から中風で臥床したのだが、いちばん心配したのは養孫高枝であらう。早速義門に連絡（三月廿四日付）した。折返し、義門の許から返簡が届いた。

抑私も去冬十月より極月迄疥癬悩み、正月には一旦宜く候処
又再発。仍之古今新釈校訂遅り、二月上旬大分快く取懸り、
則二月六日付呈書仕候。未相達候哉。……さて古今新釈二月
六日比より取かゝり候処、又々小瘡三発にて漸く三月下旬本
快、仍之追々拝見、則昨五日迄に春より羈旅九迄九冊はり
がみを以愚存書をへ候事に御座候処へ、右書状今日到来、御
心急ぎ御尤至極と奉存候間、取あへず右九冊先々大坂河儀へ
向け出し申候。はりがみ今一度しかと筆あざやかに書取申度
候へども、急ぐまゝに先々此まゝ上候。御老眼には難分候半
も恐入候へども、御よみ聞かせ、或は御書直し御覧に御入れ
可被下候。古今集序新釈一冊はあとまはしに仕居、今日未功
一冊はあと便おひつぎに四五日中に又々出し可申、先々件の
九冊春より旅迄の歌の分出来上りだけ一刻もと、今日封包仕、
京を一つとんで大坂河儀への便に出し候。

草稿を直接河儀へ送ったというのは、予め高尚も了解していたの
だろうか、それとも高枝の要請だったのか。高枝なり義門なりと
しては、ともかく高尚の存生中に、何とか『新釈』を上梓したい
という気持で、いっぱいだったのだろう。それが高尚をこのよう
に憤激させた理由は、何だったのだろう。老人のひがみもあろう
が、とにかく何かがあったのだろう。

1 高枝宛義門書簡、「御老翁様三月十日より御中風とや、さてさ
て驚入申候」(「藤井高尚伝」所引)。

2 養孫、左衛門佐。

四五 前簡では『古今集新釈』の草稿は、早ければ来春にでも渡
したいが、一応「来年中と御心得可被下候」と言っていたが、本簡
では、「再応之吟味行届不申、急ニ書林へ渡候事出来不申、年内
中も無覚束位ニ御坐候」と言っている。病気のこともあったが、
草稿はまだ完成していなかったのである。それなのに出版元の方
だけ早く決めたいというのは、一つはあせりでもあり、一つは河
内屋との関係から、どうしても永楽屋に引受けて貰いたいという意
地もあったのだろう。

1 永楽屋。

2 田中重太郎氏が、『春曙抄』書入の一本を蔵する(長沢伴雄の
「古寺月」田中重太郎・洛味『二二二』)。

(附記)

高尚は、天保十一年没した。『古今集新釈』の草稿は、未定のま
まであった。高尚の生前、『新釈』の校訂に当った義門は、天保
十四年、四国・中国の旅の途次、備中倉敷から宮内を訪れた。今
度の旅の目的の一つが、「吉備津宮内にして藤井高尚翁の古今集
新釈のとりしらべまほしき」ことにあったからである。『袖濡の
日記』(天保一四)には、

(五月) 八日、古今集新釈の事をおもひて、故松斎翁の影前
に顔く。よみてそなへけるは、

雪をおきてすさめをれとかあつさ弓春夏秋の月花をのみ
新きときことのおとのなりさくはゆめ見こそあめよなかあ

かつき

これは、釈秋の部迄はひとよせよみてしかと、冬より末いかなれるらんと思てなり。

堅詠草にそかきぬる。かくて翁のうまこ今の藤井のあろし高枕ぬしにとふに、すなはちとうてよみせらるゝは、冬・賀・雜・別・羈旅・物名のかきり、さては恋一の新釈なり。恋二より末は、まことに反故のうらなとに、卿案とも卿案ののみありて、よみつゝくることもかたし。いかてこれ補ひなども物し給へと、今のあろしならひに直わたりのをしへ子たちに任せて、冬より物名までをはけふよりわれいさこゝにとて校合めく事ともつとむ。(『義門の研究』所引)。

と記している。従つて高尚の草稿は恋一までであり、義門の校訂

新刊紹介

杉本つとむ著

『女のことば誌』

女性とことば——意外と研究の少ないところである。本書は第一部八女のことば誌Ⅴで諺・女偏の漢字・ひらがなの創造・女にまつわるコトバ、第二部八女のことばの歴史Ⅴで女性の使つてきたコトバをさぐるなから女性の生活・役割・行動を総合

も物名までで終つたようである。「藤井高尚伝」には、

古今集新釈ハ自筆ノモノ数本アリ。余ノ蔵セルハ最後ノ清書本ニテ又巻数ノ最多キモノナリ。即、序・春上・春下・夏・秋上・秋下・賀・離別・羈旅・物名・恋一・恋二・恋三以上十三巻ナリ。初ハ全部二十一巻ソロヒタリシニヤ。又ハ恋四以下ハ初ヨリ欠ケタリシニヤ詳ナラズ。文合ノ奥付ニハ十冊トアリ。吉備国歌集ノ奥付ニハ十五冊トアレド阿説イヅレノ証トモスベカラズ

とあるが、いづれにしても未定に終つたことは確実であらう。

なお、ここにいう十三巻本は、明治四十四年井上通泰により歌書刊行会から刊行、原本は大正十二年の関東大震災で焼失した。

的に考察しようとするものである。これは著者の近代日本語の成立研究のごく一部を成すものにすぎまいが、コトバを常に動態的にとらえようとするダイナミズムがここにも脈打ち見事に女性の言語生活史を浮き彫りしている。それゆゑ豊富な資料を駆使した平明な記述は決してやさしい読み取りを期待するものではあるまい。むしろ今日ジャーナリズムが女性を抜きにしてはありえず女性の日常性に迎合的ですからある状況、そして女性の甘え、これらを痛烈に批

判する文明批評とさえいいえる。著者は〈現代は《日本語》に関するかぎり、静かに考えこむ時代であると思う〉とあとがきに記している。

(昭50・12、雄山閣刊、B6判、二一七頁。六八〇円)